

第2回コンテスト入賞作品（講評入り）

①部門（写真：教師が撮影、詩：児童作品）

優 秀



城山を登っている後ろ姿の写真を選んでいるのが作品の面白みを深めています。

「三番になった」の繰り返しや、最後の「三番サイコー 山登り」という表現のリズムのよさ、「サイコー」という言葉の面白さから、遠足での楽しく、はずむような気持ちが伝わってきます。

フォトポエムを作るときに、自分の思いと合うような写真を選んだり、文字の位置を工夫したりすると、思いがもっと伝わる作品が出来上がります。作りながらいろいろ試してみてください。

②部門（写真も詩も児童作品）

最優秀



まずは写真。偶然がなせる技“瞬間の奇跡”の一瞬がとらえられています。10人の動きがそれぞれ自然体であり、一人一人に吹き出しをつけたいほどの個性と団体としての楽しく温かいまとまりが感じられます。

そして詩。余計な説明もなく、簡潔に遊びの情景が描かれています。「詩を作ろう」の単元で教科書に載せてもいいとさえ思いました。

写真が文字を邪魔せず、文字も写真を邪魔しない、いいバランスの構成となりました。両者が互いに助け合い競演し合っているいい作品です。

優 秀



この作品でまず目を引くのは写真の撮り方です。松の葉や枝の色を出さず、影として写し込んでいることによって、その向こうにある雲から出てきた瞬間の太陽の明るさを余計に感じさせる、味わいのある写真となっています。

また、その明るい部分に文字を配置したことによって文字を際立たせるとともに、視点をそこへと向かわせる効果も合わせもっています。さらに、本来なら風に揺られて松の木の方が動いているのですが、「松の木にあわせて」空が動くという作者の対象に対する素直な感じ方が表されており、見る人に共感を誘う作品となっています。



この中
 なんだかボーッととして
 見とれてしまう空間
 なんだかサラサラサラ
 とんでいきそうだ
 あのそのままで
 あのそのままで

ジャングルジムから、ふと真上を見上げると、そこに吸い込まれそうな青空が広がっている…。この作品の写真は、一度は目にしたことがあるけれど、忘れかけている子どものころの想いをよみがえらせてくれました。小学生の今だからこそ、写すことのできる視点を表現したところは、すばらしいと思います。

また、空の青とジャングルジムの青、雲の白と字の白の配置は、見ているだれしものが、一目でさわやかな気持ちにさせてくれる絶妙の色づかいです。文字のレイアウトは、字の太さも字体も様々に変えていて、作者のこだわりが伝わってきます。

「なんだか、ボーッととして 見とれてしまう空間」という言葉は、見ている私たちも、ボーッと見とれてしまうようで、気持ちを共有できる言葉だと思えます。さわやかな後味を残しつつ、作者の思いに共感して、共にとんでいきそうな素敵な作品だと思えます。

愛媛CATV賞



四次元空間へ
 ここは
 四次元空間への入り口だ
 ぐるぐる
 へんげんげんの
 輪の中は
 輪が
 ああ
 今にも吸い込まれそうだ

四次元という見たことのない世界への不安感や期待感を、写真から感じ取りました。

あえて水平にせず、少し傾けた不安定な構図で、不安な気持ちを表現できています。また、色の褪せた鉄輪の先にカラフルな遊具を写したことで、まだ見たことのない四次元空間への期待を感じさせることができ、三次元と四次元の対比をうまく表せていると思えます。

ピントのぼけた鉄輪を一番手前に写し込んだ大胆な構図は、あたかもその場で見ているような錯覚に陥ります。見やすい文字の配置も絶妙で、詩を読み進めるうちに言葉ひとつひとつに感情移入して、本当に吸い込まれたような気持ちになりました。

一見どこにでもある学校の遊具が、切り取り方一つで大きく見方が変わり、見る人をひきつける一枚になったと感心しました。

D-pro賞



この田んぼは
 わたしにとって
 どこまでも続く
 大草原

この作品のすばらしさは、人とは違う見方をして、田園風景の中に「大草原」を見出すところからできたところです。荏原地区には、たくさんの方の田園風景が広がっています。多くの方は、普段見慣れたこの田園風景を、みんな何気なく見ているのではないのでしょうか？そして、当たり前前の風景なので、「田んぼ」があることすら意識することさえないかもしれません。その普段当たり前に見ている風景を、視点を改めて見ることによって、新しい発見をした、観察力や創造力がとても優れています。また、稲の青々とした色が大変鮮やかで、見ている人をととてもすがすがしい気持ちにさせます。